

中国を考える特集 Ⅱ

『私たちが“おつきあい”を始める』

中国について

中嶋嶺雄

(東京外国語大学助教授)

——中国からのテレビ中継でいちばん印象的だったのは、北京の広い通りと二重の街路樹。車公害もなく、まるでユートピアのような感じを受けましたが……。

都市計画をしようにも、どこから手をつけていいかわからないような過密都市・東京から見たら、なるほど、羨ましいほどシャントできていますね。

北京市民の足は自転車とバスですし、光化学スモッグや排気ガス公害に悩み、バイコロジ運動(自動車をやめて自転車に切りかえようとする「反公害運動」)まで起こっている国の住民には、ユートピアのようにも見えるでしょう。

しかし、これから工業化をおし進めていこうとする中国は、公害に対しては、

当然、日本の轍をふまない配慮はしていませんが、その中国だって生産をあげるためには農業や化学肥料を使わざるを得なくなっていくでしょう。公害があるからといって、今さら南方諸島で行なわれている焼き畑農業のような自然農法をやるわけにはいきませんからねえ。

それに、田中首相の訪中のときの北京の表情は、必ずしも素顔ではない。第一、街頭に人があまりにも少なすぎたし、表通りだけしかテレビでは映っていないわけで、北京も上海も一歩裏通りに入れば、中国人社会特有の混沌と人ごみにあふれていますよ。

——先生は一九六六年に北京、七〇年か

ら七一年にかけて香港で研究生生活をなさっていますが、素顔の中国の人々の印象はいかがでしたか？

素顔といっても、外国人にはなかなかそこまで触れられないものです。僕が行ったのは文化大革命の激動期で、それだけに「自由行動」が比較的可能だったし、言葉もできますからかなり素顔の民衆に触れましたが、一般に「外資(外人のお客さま)」として行っても、素顔にはどこまで触れられるかどうか。

たとえば日本を訪れた舞劇団やバレエ団の選手の人たちでも、団体バスで皆一緒に行動しているでしょう。個人で新宿や池袋に出歩くようなことはしない。日本を訪れた中国の代表団の人々が、

自分の眼にふれた日本や日本人だけを素顔の日本人だと思い込んだとしたら、私たちは、それだけではないといいたくなるでしょう。それと同じことです。

私が北京を訪れたときは、文化大革命の真っ最中でして、紅衛兵が街中を真っ黒になるほど埋めつくしていました。どこを歩いても紅衛兵です。街で会った十五、六歳の女の子の紅衛兵たちに話しかけたら、彼女たちは、興味シンシンという顔つきで、無邪気にいろいろな質問をあげてきましたよ。私をとりまいて、「東京には貧しいプロレタリアートがいっぱいいるでしょ」「日本はアメリカの基地だらけで、日本人は飢えているんだって?」とか、こんな調子です。ま



広大な中国の風景を代表する万里の長城

あ、外の世界のことは知りたいては、日本にしろその国の安否の手なちと変わりなす。日中兩國は、もつとお互いにあるがままの事を知り合う必要ありますよ。

——紅衛兵運動はもうなくなってしまったようですね。

ええ、そのとおりです。紅衛兵というのは、たしかは毛沢東らの指導によって組織化され、動員されたんですが、一方で彼らは、心情的にはなんといったらいいか、とっぴーみたいなところがあつたんじゃないかという気がしますね。

中国の一般の民衆は、自由に国内旅行はできません。他県に出かけるときは通行証みたいなものがあるのです。県といつても、日本でいえば郡くらいの広さです。それが文化大革命のときは、通行証がなくても北京にいけることになった。狭い地域しか知らなかった若者たちが、これはチャンスとばかり飛びついたのは、自然の欲求だったでしょうね。

「毛主席の長征をみならおう」と、ナカマスタイルで、北京へ北京へと集まってきました。

ところが、文革の嵐も一応落ち着きはじめてとき、街中にあふれていた紅衛兵に対して、こんどは農村へ行って毛沢東思想の實踐に努力すること（下放運動という）という党の方針が打ち出されたわけ。それで、北京市内から紅衛兵は姿を消したのですが、一度とっぴー的な空気を味わった若者のなかには、なんとなく挫折感を感じて、香港に逃げ出す人

もあつたんです。私が香港で会ったある若者は、紅衛兵運動は学習という生活がイヤになったから、といていました。

この国にも、体制からはみ出す若者はいるものです。しかし、中国人が他の国の人々と違うのは、それでも自分は祖国を愛護したのでない、やはり祖国中国は偉大な國だと考えていることです。

——それでは、毛沢東の目指している理想の社会というのは、どのような社会なのですか？

本来、マルクス主義というのば、豊かな社会をつくっていくことによつて、差別をなくし人間性を回復していくこととする、いわば西歐的觀念に基づくもので

これに対して、毛沢東型理想社会とい



うのは、簡単にいってしまえば、清く美しく、平等という精神主義に基づいた、「貧しさの海のよりどり」といっていいでしょうね。

衣食住についてはいろいろ報道もありますが、實際にはどうなんでしょうか？中国の人たちの生活は、きわめて簡素です。衣服はいわゆる工人服で、何れも洗ったのを、ていねいにぎはぎして着ています。全人口にゆきわたるのが大変なのでしょう。食べ物も衣料も切符制です。

食生活に関しては、そのバラエティーとバイタリティーは大変なものでしてね。何千年という中国の歴史をとおして、中国人のあらゆる生活の知恵と、研究成果をつぎこんだ、いわば文明の結晶といえるくらいです。四つ足の動物で食べないものはない、といわれるほど、すべてを利用しているのですから。

私が見た紅衛兵の食事は、泡飯という野菜が入っている雑炊のようなものでしたが、これだつて生活の知恵の産物。必要な栄養はふくまれていますからね。

住宅は、「労働者住宅」(アパート)もたくさんできつづつあつて、かなりよくなりつつありますが、これも日本人的な感覚で考へてはいけません。中国人はもと

もと一軒の家に十人くらい住むのが普通でしたから、彼らは部屋数なんかあまり気にしてません。日本の觀念であてはめようとしても、比較できないことです。

——女性の立場から、家庭生活と教育問題についてうかがいたいのですが……。

家庭生活については、今日の中国には専業主婦はいません。結婚しても女性は無業をそのままと認けています。だから託児所は発達していて、多くは月曜から土曜日まで預けて、週のうち一日は家庭で過ごすというもの。もちろん毎日家に帰るものや、親が長期にわたつて家を留守にするときは、ずっと預かる託児所もあります。

文化大革命以来、下放運動によつて家族がバラバラに別れている場合が多いので、日本的なマイホーム主義はまったく存在しません。もちろん、今日では教育ママもいないでしょう。勉強がいくらできても、思想が正しくなければ大学に入れないんですから。もっとも、教育制度はまだ改革途中で、はっきりした方向が定着してはいませんが……。

生活費自体は安いのですが、共稼ぎをしなければ貯金をするゆとりがないというところもいえますね。現在、中国民衆の三種の神器は、ラジオと自転車とミシンだといわれています。私の聞いたところでは、普通の労働者が夫婦で働いて、一年間にミシンが一台買えるくらいというのでした。

——中国の人たちの政治に対する姿勢についてはいかがでしょうか？

私が中国と中国人の強さ、しぶとさについて考えるとき、出てきた結論は、中国人は伝統的に政治というものを盲信せず、したがって政治がなされる限界を本能的に知っている民族だということです。なるほど、大衆の支持がなければ、

肥満体で比較的体力が
あり便秘しやすいかたの

肥満症 常習便秘 耳鳴り…に

●ハセットピンクは、おだやかな作用で
効果をあげる漢方薬。主として天然の
薬草でつくられています。ご安心くだ
さい。のみにくそうな「せんじくすり」
ではなく、かわいらしい錠剤です。
●ムリのない食事コントロールを実行し
ながらご使用になれば一層効果的です。



漢方薬
ハセットピンク

三恵製薬

という見方が一般的で、しかし、私
にいわせれば、逆に中国の大衆が政治と
か権力とかをそれほど信じてはいないか
らこそ、逆説的に「毛沢東思想、万歳、
万万歳」と唱えることができるのだと思
うのです。ところが日本人は、ドク板が腐
っていることから外交政策に至るまで、
すぐ政治が悪いからだという。これを裏
返せば、じつは日本人が政治というもの
を丸ごと信じているからなのですよ。

中国の民衆は、指導者が誰になろうと
も、常に自分たちの生活の知恵を大事に
して、生きる道をさがして、いっています。
実に愛協的で、裏の裏まで読みとって行
動していく民族ですね。ものごとを選択
する場合でも、これがすべてだという決
め方をしない。これがだめなら、あれに
してみようという態度なのです。日本人
なら、すぐ白か黒かを決めたがり、いさ
ぎよさを導びますが、こういう選択方法
は中国人にとってはもっともまずいやり
方なんです。

にも現われているように、アメリカ帝國主義
の頭目を打倒せよといったいながらニク
ソンを招いたり、昨年まであれほど日本
の軍国主義化を攻撃していたのに、こん
どは自民党政府を大歓迎したりする。や
はり、本心では、いずれ日本と友好関係
を結び、国交回復できることを読みとっ
ていたからなんです。

——日中国交があまりにも急速に実現し
たようにも思われますが、この点はどう
でしょう？

日中が接近したことについて、中国側
の理由としては、国内の生活のレベルア
ップをはかるためには、日本の経済力が
必要なこと、中ソ対立という点から国防
上、日本の産業を利用したいことがあげ
られます。一方、日本の財界としても中
国市場は魅力的ですからね。

日本の政財界はそこまでするのがあるか
うか。浮わついたムードに酔っているど
う失敗しますね。

——しかし、日本と中国は同文同種だか
ら、何となくわかり合える民族だとい
う気もしますが……。

それは甘いですよ。日中のつき合いの
歴史は長いけれど、日本は中国文化のエ
ッセンスだけをとり入れて、つねに日本
的に変容させてきました。寺院ひとつみ
ても、日本の寺では枯淡を尊びますが、
中国寺院は原色ギラギラのものが多く、
まあ現代風にいえばサイケデリック調で
すしね。

同文といっても、日本と中国では意味
や発想が違ふ言葉はたくさんあります。
たとえば、中国では非常口のことを太平
門と書きます。緊急避難の場所に、あえ
て「太平」という文字を、逆説的な発想
でもって使うというところに、日本人と
中国人の根本的な違いが現われていると
私は思いますね。

料理だって、日本料理と中国料理は水
きるほど違いますね。

——最後に、国交回復後の日中関係のあ
り方について、先生はどのようにお考え
でしょう？

日本と中国の関係は、異母兄弟のよう
なものです。だから異母兄弟としてのつ
きあい方を見つけていかないと、他人同
士よりもむずかしい関係になるおそれ
がある、やたらベッタリするのもなく、
むやみに反発しあうでもなく、一定の距
離をおいてクールでドライなつきあい方
をしていくことこそ、アジアにおいて大
きな力を持った異母兄弟としての日中両
国が、これから長い将来にわたって、友
好的かつ対等につき合っていくことがで
きる道だと思いますね。